

## 滲出する暴力

—内なる否定者(denier)の心理状況を源泉として—

中原 淳 一

### 目 次

- I. 問題意識とこの稿の意図
- II. 2000年度調査の要点
- III. プロファイルの酷似
- IV. 刺激語間相関行列に対する因子分析
- V. 尺度間相関行列に対する因子分析
- VI. 内なる否定者の現出
- VII. 社会的性格
- VIII. 権威主義
- IX. 滲出する暴力

### I. 問題意識とこの稿の意図

近年、暴力的な事件が頻発し、この国の多くの人々が攻撃的になっていると考えざるを得ないような事態に立ち至っている。人々は現在どんな心理的な状況にあり、何が人々を攻撃へ駆り立てているのだろう。少年の頭部が切断されて校門の上に曝されるという戦慄的な事件起き、しかもそれはその時だけの突発的なことではなく、それ以来この国の精神的状況を憂慮せざるを得ないような事件が多発している。暴力は、暴力に有効に対処できない弱者に向けられた時に、それ本来のいい訳の出来ないおぞましさを示す。その意味でも最近の暴力事件は、成人や青少年という身体的強者が、幼児、幼稚園児、小学校低学年児童、老人、無宿者(ホームレス)、さらには母親の彼女自身の乳飲み子というような、完全な身体的弱者を暴力のターゲットにしていることが多い点で、民族の精神の明らかな衰弱を示している。

また多発するエリートの犯罪も、権力という“力”の行使を含んでいるのであるから、その意味での暴力事件であり、インテリ・ヤクザの威しのように、一層おぞましい。かつて、この国で最も軽蔑される行為は「弱いものイジメ」であったが、現代日本では「弱いものいじめ」が横行している。ノーマライゼーションやバリアフリーの言葉で語られることや“子供の権利”を条約化しなければならないこと等には、裏返せば、それを必要不可欠とするような状況の深刻化が現われているのである。弱者を守ることが、人格的・心理的に遂行されていくだろう事を期待出来なくなった時、法や条約が必要になる。電車やバスの“…優先席”にどっかと座って目を瞑り知らん顔をしている若者は、自分が敢えてルールに反抗しそれを彼自身を知っていることを示している。しかも彼が為していることが“弱いものイジメ”と同等であること知りつつそれを為しているとしたら、民族の精神が衰弱したこと、この民族の将来がたいして期待の持てないものであることを認めないわけにはいかない。

さて数年来、筆者は現代日本の青年が「環境問題に関連する諸概念について形成しているイメージ」について調べることを1つの研究課題にして、帯広市の高等教育機関に在籍する学生を対象に、調査研究を行ってきた。当初、筆者の関心はテーマに言うように無論「環境問題」であって、身の回りの事柄についてのイメージが、「環境保護」や「ゴミの始末」や「エネルギーの節約」にどんな役割を担っているのかを知ろうとして、その手始めとして「環境問題に関連する諸概念」について、そのイメージを

Osgood によるSD法(7,8)によって調べたのである。調査結果とそれに基づく考察は、'96年度と'97年度の帯広畜産大学紀要に報告した(1, 2.)。そこでの主要な知見は、筆者には思ってもよらないものであった。そのことは筆者に新たな問題意識、この稿でも取上げるようなそれを惹起したのである。

調査から明らかになってきたことは青年達が彼等の日常的な環境世界で出会う事象、事物、人物についてイメージを形成するとき、①事象や事物や人物の負の側面(negative side)或いは否定性(negativity)とでも名づける特性がどれぐらいのものであるのか、或いはその否定性をどれぐらいの程度示しているのか、こうした点についての評価が最初に為されること、②そのことが対象についての「イメージ形成プロセス」の全体に対して持っている重みが極めて高いこと、等が因子分析によって明らかになってきたのである。結果を敷衍してもう少し具体的に言えば、現代の日本人は(以下のことは青年に限ることではないと考えるから)、身の回りの日常的な環境世界で、それに会うことがそんなに稀ではない事象や事物や人物について、「それがどの程度の否定性、具体的にはどれぐらいの「醜さ…」であるかについての評価を先ず行ない、それによってその対象の持つ意義や意味が殆ど決まる」と考えて良いということである。美点や長所の判断が最初に為されているわけではない事に注意してほしい。人が最初に見るのは対象の美点や長所の対極としての欠点、広い意味での(醜さ…)、つまり「ダサさ」の程度なのである。欠点が、長所と同じ軸や平面で、長所と同時に判断されて「欠点があるが長所もある」と中立的に判断されているわけではないのである。「先ず欠点検出ありき」であり、対象の持つ「欠点の重み」が第一の「対象の重み」である。

ここで「醜い…」とは、もちろん容貌の美醜についてだけ云っているわけではない。「君が就職に失敗したのは醜い…」「君が偏差値の低い

大学に在籍しているのは醜い…」「君の家庭が貧乏なのは醜い…」「君が肥っているのは醜い…」「君が潰れそうな小さな会社で仕事についているのは醜い…」「君の民族がGDPの極めて低い国家を形成しているのは醜い…」のように、人間の生活と民族の歴史のありとあらゆる事について、それらを優劣の次元で評価して、そこでの劣位を表す象徴言語として「醜い…」があり、劣位に対する差別的な象徴表現になっているのではないかと思われる。

これまでの調査では、最も因子負荷量の大きい評定尺度での、負荷の掛かっている側の形容詞が「醜い…」であるが、この形容詞は大抵の場合「不健康な…」「悪い…」「危険な…」という形容詞と連動していた。「危険…」で「不健康…」なものを「醜い…」と捉える心理はさほど危険でも不健康でもないが、「醜い…」ものは「危険…」で「不健康…」だという事になれば、美醜の判断が優れて社会的・文化的であるが故に、社会の優位者が劣位者に「醜い…」というレッテルを貼って、彼等は「危険で…」「不健康…」だとして、差別し除外し隔離し、はては虐殺する行為を正当化することにもなりかねない。我々がこの「醜い…」判断に拘泥する理由である。

触れ合う対象が「醜悪である…」という評価は、やがて「侮蔑・疎外・排除」という行為に結びつくだろう。このような自らを対象から「切断する」心理は、「優しさ」や「暖かさ」のような「触れ合う」「出会う」心理とは違ったものであるが、「美しい」とされるものや「強い」とされるものへの、「讃仰」や「憧憬」という「結合や粘着」を求める心理とは別の次元でなく、両者は同時に成立し得るものだと考えられる。

大衆がカリスマを強く求めている時、彼等は同時に「讃仰するカリスマに敵対する人物や集団」を排除したいという心理的状況にある。ナチズムにおける「ヒトラー讃仰」と「ユダヤ人侮蔑」が同じ根から分かれた枝であることは周知のことである。

さて我々の調査(1, 2, 3)では, ある刺激語の纏まりを被験者が評定尺度で評価することで成立している。この刺激語の纏まりが, ある特定の狭い方向へ傾くことの無いようにとの配慮が為される。刺激語がある特定の領域を表しているようにと選ぶと, 得られる因子が大きく変化することがある。刺激語を「地球」「十勝・帯広」「牧場」「生態系」「コンピュータ」の5語として調査したグループでは, 第1因子の内容は「明るい, 澄んだ, 美しい, 柔らかい, 良い」として得られた。十勝地方の牧場の持っているイメージがどんなものなのかが判る。「十勝」を冠したバターやチーズの商品が存在する理由である。この刺激語群に「病院」「原子力発電所」「産業廃棄物処理施設」「難民」等を加えると, 第1因子の内容は「暗い, 濁った, 醜い, 硬い, 悪い」となった。つまり同じ尺度で否定性の方が強く現われるのである。一般通念的に美しいとされているものだけを集めると, 因子の内容に「醜い…」とそれに関連するものは当然ながら現われてこない。だが一般通念的に美醜・善悪を取り混ぜていると考えられる刺激語群については, 「醜…」の側面が強く現われて来る。次にはこれらの点も踏まえて行なった調査研究の結果を報告するが, 調査実施上の詳しい手続きについては(1, 2, 3)と同様であり, それを参照していただきたい。今回はそこでの問題意識を延長して刺激語群を大幅に変え, 評定尺度もそれに合わせて一部分変更したので, それら変更部分については記述する。

## II. 2000年度調査の要点

調査は, 2000年度に本学の講義「行動科学概論」を受講した学生諸君にインフォーマットをお願いして実施した。協力者は135名。十分な観測数が得られたものとする。使用した刺激語は以下に示す10語である。

- |                 |          |
|-----------------|----------|
| 1.「遺伝子操作技術」     | 2.「携帯電話」 |
| 3.「二世(ジュニア)の人々」 | 4.「少年」   |

- |               |           |
|---------------|-----------|
| 5.「ベンチャー企業」   | 6.「高齢者」   |
| 7.「産業廃棄物処理施設」 | 8.「森林」    |
| 9.「介護ロボット」    | 10.「社会福祉」 |

この10語のうち, 「森林」と「産業廃棄物処理施設」の2語は, これまでの調査でもたびたび使用してきた「刺激語」である。他の8語は, いままで使用したことがなかった。今回の調査が「刺激語」と「インフォーマット」の2点で, 今までの調査とは調査の対象としているものがいささか異なっていると主張する根拠がある。この10語を, 以下の20の評定尺度で評定するのがインフォーマットに課せられている。尺度は, 表1に示したように, 対になっている形容詞を両端に配した7段階である。

表1

1. 不安定な	… …	安定した
2. 硬い	… …	柔らかい
3. 冷たい	… …	熱い
4. 健康な	… …	不健康な
5. 重い	… …	軽い
6. 弱い	… …	強い
7. 新鮮な	… …	腐った
8. 古い	… …	新しい
9. はっきり	… …	ぼんやり
10. するどい	… …	にぶい
11. 深い	… …	浅い
12. 醜い	… …	美しい
13. 速い	… …	遅い
14. 良い	… …	悪い
15. 現実的	… …	夢のよう
16. 動いている	… …	止まっている
17. 明るい	… …	暗い
18. 安全な	… …	危険な
19. 澄んだ	… …	濁った
20. 騒がしい	… …	静かな

この20の評定尺度は, 今までに筆者が用いてきたものと殆ど同じである。これまでに使用してきた尺度のうち, 3.近い…遠い 4.積極的な…消極的な の2つの尺度を外し(今までの調査で常に因子負荷量が小さかったことが理由である), 速い…遅いの尺度を13番目の尺度として加えて総計20の尺度群としたが, これまで

の尺度構成と決定的に異なっている訳ではない。筆者の目的が、今までに得られている内容の確認にあるのだから、これは必要なことであったと認識している。以上の2点以外は、今回の調査も以前に行われたものと全く同様に行なったので、細目については記述せず、直ちに結果を報告する。

### Ⅲ. プロファイルの酷似

今回の調査での、各刺激語に対する被験者の評定値の算術平均を、各尺度ごとに纏めたが、全体は多量で提示するのも煩雑であり、以後の議論での主要な基盤でもないので、筆者の以前の調査と共通している刺激語についてのデータのみを提示する。

今回用いられた刺激語のうち、[森林][産業廃棄物処理施設]の2語は、筆者による帯広畜産大学での96年度(Ch96と略記)と97年度(Ch97と略記)の調査においても用いている。今回の調査(H-00と略記)での同じ刺激語にたいする反応と比較するために、各尺度ごとに被験者の反応の平均値を表にする。また、今回[高齢者]として使用した刺激語は、畜産大学での調査で使用した[老人]という刺激語とほぼ同等であると考量して、これを[老人・高齢者]として表に含める。ただし評定尺度については、大部分が共通しているが、全く同じではない。帯広畜産大学で用いられた評定尺度から尺度3と尺度4を外し、さらに尺度13として「速い…遅い」を尺度「醜い…美しい」の後にいれると、今回の北星学園大学での調査で用いた評定尺度、つまり表1になる。このように尺度も共通化し、以上の内容を表にしたのが表2である。

表2

刺激語[森林]

	Ch96	Ch97	H-00
尺度 1	4.28	5.09	5.18
2	4.99	5.43	4.97
3	4.19	3.98	4.06
4	2.71	1.93	2.39
5	3.17	3.31	3.31
6	4.28	4.97	5.18
7	2.25	2.38	2.37
8	3.70	3.84	3.46
9	3.79	3.96	3.88
10	3.83	4.00	3.83
11	2.09	1.75	2.10
12	6.07	5.82	6.06
13	2.10	1.91	2.06
14	3.84	3.84	4.29
15	3.38	3.54	4.34
16	3.11	3.46	3.73
17	3.29	3.21	3.36
18	2.09	2.06	2.01
19	6.06	5.68	6.28

刺激語[産業廃棄物処理施設]

	Ch96	Ch97	H-00
尺度 1	2.32	2.11	2.29
2	3.36	2.39	2.40
3	2.94	2.77	2.29
4	5.94	6.02	6.06
5	2.22	2.01	2.24
6	4.10	4.13	4.26
7	5.68	5.61	5.41
8	3.37	3.65	3.56
9	3.98	4.38	4.13
10	4.21	3.89	3.89
11	3.30	3.43	3.52
12	2.33	2.54	2.56
13	4.63	4.90	5.06
14	2.20	2.00	2.31
15	2.78	3.54	3.14
16	5.58	5.43	5.48
17	5.66	5.77	5.98
18	5.86	5.73	5.83
19	2.98	3.05	2.87

刺激語[老人・高齢者]

尺度	Ch96	Ch97	H-00
1	3.09	3.38	2.83
2	4.27	4.11	4.07
3	4.19	3.62	4.14
4	4.68	4.79	4.98
5	4.12	3.86	3.71
6	2.71	2.79	2.65
7	4.29	4.40	4.30
8	2.69	2.48	2.60
9	4.77	4.71	4.97
10	5.11	5.05	5.17
11	2.83	2.66	2.75
12	4.12	3.89	3.92
13	3.20	3.56	3.63
14	2.87	2.90	2.79
15	3.59	4.13	3.71
16	3.92	4.11	4.06
17	4.19	3.84	4.31
18	3.67	4.29	3.90
19	5.31	5.36	5.17

評定尺度は3つの調査で共通しているのを選んでいたので、13.速い…遅いの尺度に関するデータは除外して、全体で19の尺度群となっている。つまり表2での尺度13は表1での尺度14に対応し、以下番号が1つずれて、表2での尺度19は、表1での尺度20.騒がしい…静かなに対応している。

この三つ(ch96, ch97, H-00)の組のデータはそれぞれ独立のインフォーマントから得られている。今回の調査で得られた結果を、前回、前々回のそれと比較するために、共通している刺激語ごとに、各尺度に対する被験者の反応の平均値を折れ線で結んだプロフィールを作ってみた。表からも読み取れるが、一致の度合いは驚くほどのものであった。

各評定尺度を間隔尺度であると想定することに無理はないが、それを19個まとめて単純に並べたものは名義の羅列にすぎないから、各尺度の平均値を折れ線で結んでグラフ化することには意味がない。だが尺度の順序と観測値の範囲に基準があれば、折れ線で結んだ経過をプロフィールとみなして、その意味での比較は出来る。表2をグラフ化したものが図1から3である。

プロフィールは見たとおり相互に酷似している。

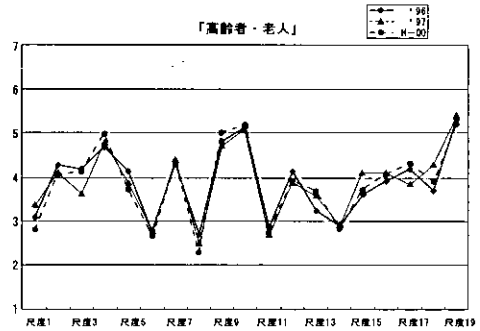


図1

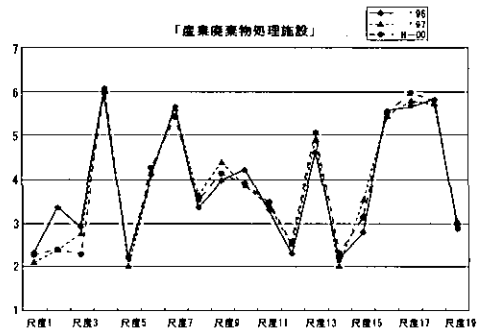


図2

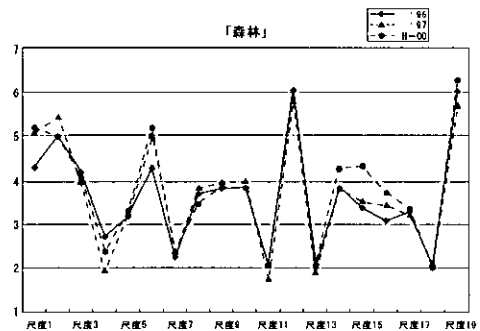


図3

刺激語ごとにプロフィールが異なることは直ぐに見て取ることができるが、年度による差異は全く認められない。被験者は一度しか調査に参画していないのであるから、各被験者の測定値の平均値としてグラフ上に示されている各測定点の一致の度合いはかなりのものとしなければならない。ただし、年度での差異がないことを統計的に確定し、それを拠り所として議論を進め

る必要があるわけでもないので、ここでは、数年に亘って安定して測定が行われていることを指摘するにとどめる。

#### IV. 刺激語間相関行列による因子分析

因子分析は変数間の相関行列に対して実施されることになるが、SD法の場合には、データから、刺激語を変数と見た場合と尺度を変数と見た場合の2様の相関行列が得られる。さらに相関係数算出のための分散の基盤を、個別の被験者間に求める場合と、被験者間の平均値を使って変数間に分散の基盤を求める場合とがあり、若干の相違が出てくる。我々は相関係数のための分散の基盤を、常に被験者間に求めることに定める。したがって観測値はいずれの場合も135ある。刺激語を変数に取った場合、刺激語間の相関係数は総計100個であるが、自由度があるものは45個である。刺激語間の相関は小さく、45個の相関係数のうちに±0.4を越えるものがなく、±0.3を越えるものも5個に過ぎなかった。このことは因子分析が不透明に終わることを予測させる。

この相関行列の固有値を大きさの順に並べてみると以下のようである。

固有値 1.9031 0.5813 0.3711  
0.26900 .0455 -0.0110 -0.1451 -0.1941  
-0.2273 -0.3273

固有値のうちで1より大きいのは一つしかないから、因子は1つ求めれば充分であるが、2因子をもとめ、Varimax 回転後の直行する2因子に対して刺激語をプロットしたのが図4である。

図中のアルファベットは以下の各刺激語に対応している。A.「森林」B.「介護ロボット」C.「遺伝子操作技術」D.「社会福祉」E.「二世(ジュニア)の人々」F.「携帯電話」G.「少年」H.「ベンチャー企業」I.「高齢者」J.「産業廃棄物処理施設」。「森林」「二世」「社会福祉」「少年」が近いこと、「ベンチャー企業」と「産業廃棄物処理施設」がかなり隔たっていること、「…廃棄物処理施設」は

今回の調査で使われた刺激語群ではやや異質であること、などが示されてはいるが、これらの結果から意味ある情報が得られるとは思われない。つまり、今回のように、結果としてみれば相互に相関のあまり高くない刺激語を使った場合には、刺激語間の相関係数を因子分析してみたところで、得るところは少ない。

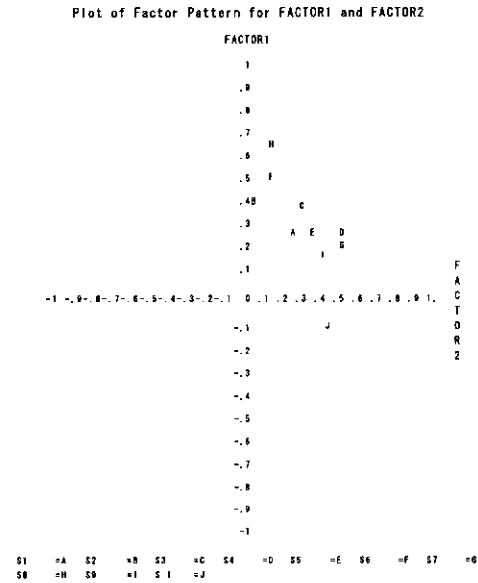


図4

#### V. 尺度間相関行列による因子分析

SD法のそもそもの目的は、概念の内包的な意味 (connotative meaning) を探ることにあり、形容詞対による評定尺度がそのための重要な道具として考案されている。現実には調査を行なう場合には、むろん無限に形容詞対を使うわけにはいかないし、調べようとする概念もおのずと制限される。したがって、調べようとする概念についての一定の枠組みが必要であるし、使用する評定尺度もそれに対応している必要がある。我々の場合、調査は「環境問題に関連した事象」として始まっているから、調査される概念も当初は「環境問題」に関連していた。しかし問題意識の章で述べたように、我々の関心は第1

因子であった「負性」或は「否定性」が、もっと一般的なものであるのかに移っている。「負性」或は「否定性」は、概念にこめられている内包的な意味である事が多いであろうから、使用した概念を群として一括し、評定尺度を変数にした因子分析が重要になる。

被験者の各刺激語における各尺度に対する反応を刺激語について潰して、各尺度について平均し、各被験者の各尺度ごとの観測値の代表値を定め、さらにこれらの被験者間の代表値の分散を基盤にして、尺度間の相関係数を求めた。これらの相関係数を矩形配列した相関行列(20×20)は大部なので省略する。この相関行列の固有値を大きさの順にならべたいわゆるスクリーを以下に図示する。

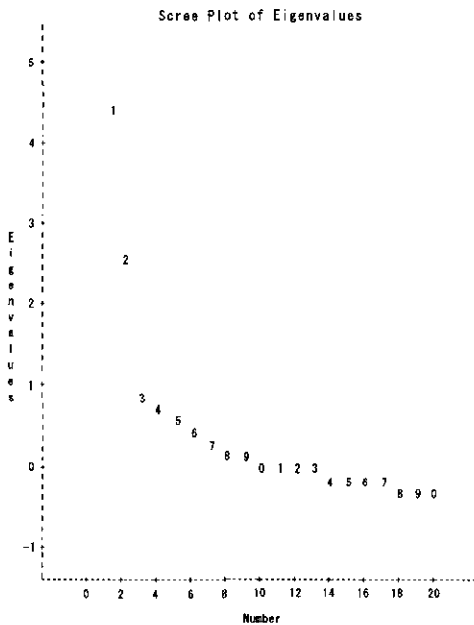


図5

1より大きい固有値が2個あり、3番目以下は良く纏まっているから、因子を2個求めることにする。

表6として varimax 回転後の因子パターンと、それを図6として図示する。

表6  
Rotated Factor Pattern

	FACTOR1	FACTOR2
S1	-0.595	0.326
S2	-0.568	0.327
S3	-0.523	0.197
S4	0.624	0.197
S5	-0.314	0.420
S6	-0.372	-0.068
S7	0.352	0.466
S8	-0.201	-0.314
S9	0.139	0.464
S10	-0.044	0.652
S11	0.136	0.353
S12	-0.534	-0.259
S13	0.062	0.506
S14	0.532	0.514
S15	0.068	0.552
S16	0.034	0.711
S17	0.651	0.332
S18	0.733	0.074
S19	0.688	0.294
S20	-0.051	0.144

結果は明晰であるが、暗澹とした気分になるものである。第1因子と正の負荷量が高い尺度は、尺度4, 17, 18, 19, であり、これらの尺度の、平均値より正の側の形容詞は、「不健康な、暗い、危険な、濁った、」である。一方、第1因子に負の負荷量があり、その絶対値が大きいのは、尺度1, 2, 3, 12であり、これらの尺度で平均値より負の側によった形容詞は、「不安定な、硬い、冷たい、醜い」である。第1因子の内容は「暗く濁って危険で不健康で、硬く冷たく醜く不安定なもの」である。そのイメージを尋ねた刺激語群は、これまでとはかなり異なっているにもかかわらず、第1因子として得られた因子の内容は、これまでと同様に、強い「負性」或は「否定性」とでも呼べるようなものを示している。

Plot of Factor Pattern for FACTOR1 and FACTOR2

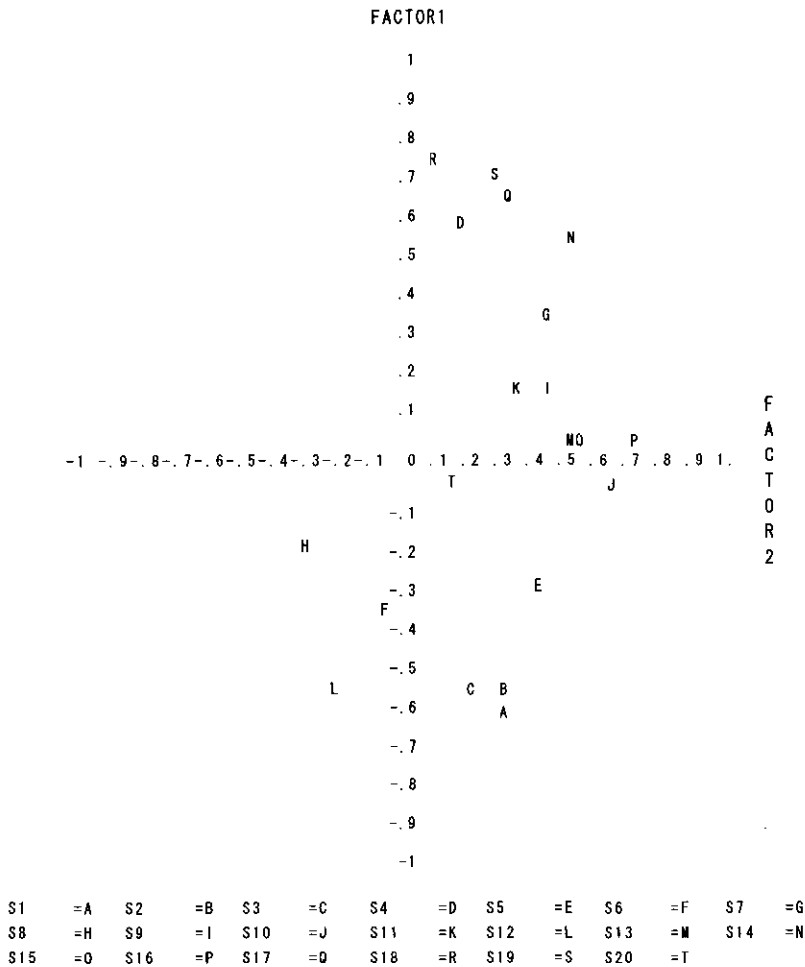


図6. 因子パターンの図示

第1因子はこのように圧倒的な“負性 (negativity)”を示したが、第2因子はどうであろうか？第1因子に対して殆ど負荷量を持たず、第2因子に対してのみある程度の正の負荷量を示しているのは、尺度10, 13, 15, 16である。

負の負荷量を示している尺度は尺度6, 8, 12であるが負荷量は小さい。実質的には無いと言っていいだろう。尺度10, 13, 15, 16, の平均値よりも正のがわに寄った形容詞は、「遅い、夢のような、止まっている、にぶい、」である。これから浮んでくるのは、茫漠として悠揚せまらざる夢のような大らかさという positive なものである

かもしれないが、同様に、ある遅滞した精神のあり様を示すものとも受け取り得る。そうであれば第1因子とはまた違った negativity 「負性」を示しているとも受けとめ得るものである。

今回の調査で用いた刺激語をここでもう一度提示してみよう。

- |                 |           |
|-----------------|-----------|
| 1.「遺伝子操作技術」     | 2.「携帯電話」  |
| 3.「二世(ジュニア)の人々」 | 4.「少年」    |
| 5.「ベンチャー企業」     | 6.「高齢者」   |
| 7.「産業廃棄物処理施設」   | 8.「森林」    |
| 9.「介護ロボット」      | 10.「社会福祉」 |



「狂牛病」のように、あからさまな「負性」(negativity)を示している刺激語があるだろうか？そのような刺激語は見当たらない。評定尺度を潰して平坦化し、平均値をもってある刺激語の値として刺激語間の相関を求めたが、高い相関を示す刺激語の対は存在しなかった。このことは、刺激語の因子分析によってはイメージ生成に関与しているかもしれない潜在因子を取り出すことが出来ない可能性が高いことを示している。そして実際そうだった。しかし刺激語を潰して平坦化し、平均値を持ってある尺度の測定値と考え、これによって尺度間の相関行列を求めると事情は大きく違って来た。尺度間の相関行列については、それが大きすぎる(20×20)ので提示しなかったが、絶対値が0.6以上の相関係数が2個、0.5以上が20個、0.4以上が42個ある。これは絶対値で0.4を超える値が1個もなかった刺激語間の相関行列の場合とはまるで異なった様相を示している。ただしこのことは我々が導く結論が artifact によるものである可能性を高くもしている。相関係数の高い尺度対が多数存在することは、似たような尺度が混在していることを示し、その影響が分析に表れて、潜在因子を現出させるかもしれないのである。このことは念頭においておこう。

## VI. 内なる否定者の現出

この調査でインフォーマントが遂行していることを、あらためて述べてみよう。彼等には評定シートが渡される。1枚のシートに1つの刺激語が書かれていて、さらに20の評定尺度が順に印刷されている。対になっている形容詞の間は7段階に区切られている。20の評定尺度のそれぞれについて、7段階の何処か1つに印をつけることで、その刺激語に対するその評定尺度での彼の評定値反応になる。インフォーマントは1つの刺激語について20の反応をすることになる。

相関行列によると、尺度17と尺度19の相関係数は0.62である。あるインフォーマントがある刺激語について「かなり暗い」と反応すれば、彼がそ

の刺激語を「濁っている」と反応する確率は「澄んでいる」と反応する確率よりもやや高い。また「安全な」と反応する確率よりも「危険な」と反応する確率の方がやや高い。相関行列を詳しく見てみると、尺度間の相関の高低について、通念で理解できる部分がかなりある。すなわち尺度の重複が目につくのである。「負性」が強くなって来たのは、事柄を「肯定から否定」に渡る尺度でチェックすることが多かったことと無関係でないかもしれないし、この論文が結論とするところを既にこの論文は先取りしたのかもしれない。被験者に渡されたチェック・シートは、それ自体が既に否定的であつたらしい。

とはいえインフォーマントが「positive … negative」に延長している尺度で「negative」の側に寄った反応をしていることはデータが示すとおりである。我々は被験者に直接に刺激語が示す概念を評価させたわけではない。概念は多面的に評定され、概念に潜む潜在因子、概念の connotation が否定性として現われたのである。しかし刺激語がそれ自体で否定性であるわけがない。「否定性」は、インフォーマントが彼の都合で刺激語から無意識のうちに読み取った刺激語の言外の意味なのであり、インフォーマントは事柄を否定的に捕らえる人格だったからだとして解釈するのが妥当である。我々是我々の一連の因子分析の結果をそう解釈する。多くのインフォーマントはなによりも先ず事柄に「負の側面」を付与する人であった。このことをやや誇張気味ではあるが、多くのインフォーマントは「否定者或いは排除者として現出する」と表現しておこう。

もとより人間は多重多層であり、相反やアンビヴァレンツを統一しようとしつづける機能体であろうから、全ての人間が天使であると同時に“内なる暴力者”であり、彼に「否定者」としての側面のあることも普遍的なことであろう。彼が「内なる否定者」を十分に上回る「内なる肯定者」を育てる事が出来ていれば、彼は他者を肯定的に受け入れることが出来て、したがって人生を肯定的に生きていく事が可能になり、自己

と周囲の人間に平和と安らぎを準備することが出来るであろう。しかし「内なる否定者」が主体を占めることは、それとは逆のカサカサとざらついて、些細なことで暴力的になる人間関係を予想させる。そのような人間関係が広がり始めた社会を、暴力的社会と呼ぶとしたら、現在の日本社会を暴力社会、少なくとも準暴力社会、或いは暴力準備社会と呼ぶことは出来るだろう。社会が全体としてある色調を帯びているとしたら、その社会の大部分の人間には、その色調に似通ったある共通した人格特性が認められるはずだと考えられる。社会的性格(4, 5)の概念はそのような概念である。安定した温和な人々が寄り集まって、暴力的社会を形成すると考えるのはブラック・ユーモアを通り越してナンセンスであるから、暴力が目立ってきた現代日本社会は、暴力的人格へ近づいている人々が形成している社会だと考えることには理がある。排除や否定は、侮蔑や差別や排斥を通じて、やがて暴力にいたるであろう。

## VII. 社会的性格

社会は、その大方の機能が社会を瓦解せしめることのないようにと社会の諸機能を方向付けておくことが必要であろうし、そのための様々な具体的諸方策が1つの理念に結晶しているであろう。しかし長年のうちに理念が事実的な建前と成り果てて、社会の「本音」は何やら面妖なものに成り代わっていることがあるかもしれない。むしろ社会の変化とはそのようなものかもしれない。社会がある期間にわたって存続している場合、その社会の「本音」の理念を自らの性格として具体化するような人物を、その社会は多数育てていて、それによってその社会はさらなる強化を受けているだろう。そのような性格をフロム、Eは社会的性格(Social Character)と呼んでいる(4, 5)。

フロムは、「一般にイデオロギーや文化は社会的性格に根ざすものであること、社会的性格それ自身はある一定の社会の存在様式によっ

て形成されること、また逆に支配的な性格が社会過程を形成する生産的な力となること」(5)と述べて、社会の経済的・政治的構造と、その社会のイデオロギー的なもの(観念、思想、文化)を媒介し接着するものとしての性格構造(特に社会的性格構造)を指摘し、三つの概念の間にダイナミックな相互関係を設定している(5)。人間は、彼を取り巻く社会的条件に適応するうちに、その社会で彼がしかるべき位置を占めるためには彼がしなければならない彼に外在する条件を、彼は喜んで欲し、それを実行したいと願うようになり、それが自分に内在する本来の欲求であり自分の実存だと考えるようになる。自らの総力をあげて自らを社会に適合させること、これが社会的性格の機能である。従って、諸個人のエネルギーは、その社会の活動に欠くことの出来ない生産的な力となるように形成されていく。社会的性格は、はじめ外部にあった必要性が、躰や教育によって個人のうちに内面化して形成され、やがてはその個人の諸活動を彼が生きている社会の経済的・社会組織の課題に適合するように準備すると考えられるのである。超自我の概念の展開である。結果として社会的性格は「ある集団の大部分の成員が持っている性格構造の本質的な中核であり、その集団に共同の基本的経験と生活様式の結果発達したもの(3)」といえることになる。

それでは我々が考えている「内なる否定者」は、上の社会的性格の概念に収まるのであろうか。排除し切断し否定する心理や行動は、人々を結ぶ紐帯にはなりえないだろうから、したがってこのような社会的性格は社会を作る「セメント」には成りえない。様々な場所、様々な水準での社会の緩慢な崩壊が予想される。ある社会的性格がある社会を作っていく、その社会がある社会的性格を育てていき、そうして育てられた社会的性格がその社会を崩壊に導いていくシナリオはそんなに不思議なものではない。

ところで社会的性格の概念が、もっとも説得的に使われたのは、フロムによる「20世紀前半

のドイツ国民のナチズム受容心理」の説明概念としてであろう。ナチのイデオロギーには、当初は労働者階級やカリック的なブルジョアジーは消極的な態度をとっていたが、小さな商店の主人、職人、ホワイトカラー労働者等からなる下層中産階級には熱烈に歓迎されたという(4,5)。彼はナチのイデオロギー(「指導者に対する盲目的服従と人種的政治的少数者に対する憎悪の精神、征服と支配への渴望、ドイツ民族や北欧人種の賛美」)がこの階級には驚くほどの魅力を持っていたことを、この階級の人々の社会的性格に求めている。彼らの社会的性格の中核にあった「服従の追求と権力の渴望」というこの権威主義的な性格は、ナチのイデオロギーを受け入れ、それを強化していった。この社会的性格は、熱烈に賛美して無条件にそれに服従する讃仰の対象と、憎悪しそれに暴力を振るうことを正当化できるイケニエになる対象を与えられれば、エネルギーを結集しそれを発散していくことになる。ヒトラーとユダヤ人が彼らに与えられた。ヒトラー体験などというグロテスクな讃仰があり、廃物ユダヤという侮蔑があったのである(4, 5)。

このように「侮蔑する」という行為は、一定の社会的文脈を満たす場合にはある社会的性格の表現として、特に権威主義的性格の表現型として現われてくる。それでは、ある対象を「不健康で」「醜い・・・」と判断し否定するのはどうなのであろうか。我々は、これもある権威主義的社会的性格が、検知した様々な差異に与える評価であって、この性格構造は、検知した差異を先ず手始めに「醜い――美しい」の尺度上で評価してその位置を見いだすように要請されていて、この事前評価によって方向付けられる次の行動(醜いものを激しく侮蔑し、美しいものを熱狂的に賛美したりする)を正当化するのが、醜いとか美しいとかと評価することの機能ではないのかと疑っている。

激しく侮蔑したり熱狂的に賛美したりすることは、日常においてはやや特殊であって、通常文脈からは外れている。しかし極めて醜いも

のを侮蔑したり、極めて優れているものを賛美したりするのは、一応は文脈に収まっているだろう。醜いと評価することは、侮蔑することを心理的に正当化する。したがって評価する機会の多い競争社会<偏差値社会>では、侮蔑することが正当化される機会の多い、したがって本音では差別を認容する社会であろう。勿論、評価以後のプロセスである「醜いと評価して、侮蔑している」ことを、人は意識的に或いは無意識的に、自分にも他人にも、見えないように或いは知れないように隠すことが出来るし、さらにはそれを制度的に隠すことなどいとも容易なことであろう。

## VIII. 権威主義

我々は、現代の日本人には、ある権威主義的社会的性格が形成されつつあるのではないかと疑っている。ただしこの権威主義は、かつてナチズムを生み出し強化したそのように剥き出しのものではなく、建前は民主的・平和主義的なものであり、直接的にファシズムだと理解できるようなものではない。

我々は様々な対象について、いきなり「どれぐらい醜いか？」と尋ねたわけではない。「不健康で…醜い」は、潜在因子なのである。一見したところ何気ない穏やかに見える判断の底に存在するものとしての、それはどれぐらい「不健康で…醜いか？」であった。この潜在因子が繰り返し現出してくることを、一過性のことだと評価することは出来ないように思う。この擬似権威主義では、「彼は我々と違うから侮蔑する」とか「彼は我々とある同一性があって、しかもカリスマ性があるから賛美する」というように、簡単に権威主義を表現したりはしない。表現は多少屈折している。主題となる対象は、先ず美醜を判定する秤に載せられる。ただしこの秤で美しいと判定されるようなものは滅多にない。なぜなら、この社会的性格で美しい優れているとされるのは、平凡な人間には出来そうもないことを成し遂げた超人あるいは超人のグループの業績や、

今ここには存在し得ない過去の景観や、それを偲ばせる数少ない秘境の景色や、「お宝」という希少価値のあるものや、ゆとりに満ちたものとして脚色されて語られる過去の生活風習だったりするからである。現在の日常で出会う大抵のものは、こうした(殆ど直接経験は出来ない)美しいとされているものや、世界に二つとないようなものと比較されるから、大抵のものはたいして美しくもなく、稀少という意味での価値もないとされる。従ってこの秤は現状醜悪度測定機とも呼べそうであり、この点で人々の判断が大きくずれることがない。美醜の判断が極めて社会的なものであることは現代に限ったことではないが、今日の日本のそれは上述のようであり、我々が得た第一因子の解釈とも一致する。

「ダサイか？どれぐらいダサイか」ということに、意識的に或いは無意識的にも何時も気を配りながら振る舞っているとしたら、この振る舞い方は表面的なことではなく、人格構造のやや深いところから現れてくるものであろう。勿論先天的なものであるわけではないが、後天的なものではあっても個人の出生条件や生活経験のような偶発的なものに由来するものではなく、彼が生きているある程度時間的に持続している社会、その社会の文化において暗黙のうちに主要なこと必要なこととされているものが彼のうちに内面化して性格構造となり、それがやがて彼の人間的エネルギーをその社会の政治・経済構造、文化構造に適合するように方向付け、ステレオタイプという社会的な鋳型に彼を入れ、そうして出来上がった性格構造から現れてくる行動傾向だと考えられる。この特徴的な行動傾向が、社会的性格と呼ぶ性格構造からくるものであれば、それに見合う社会経済的、社会文化的な構造が見やすい形であるに違いない。

社会的性格の概念は理念型であって、社会的実在なしにこの概念を造ることは容易ではないし、社会的実在が存在しなければ、それについての概念を造っても使い道が無く、殆ど無意味であらう。しかし社会経済的構造が実在

(social reality)であって、しかもそのエスとしての社会的性格について思念されているということは、その社会経済的・文化的構造がこれまでずっと我々の上に強大な威を振るってきたに相違なく、我々の場合にはそうした社会的実在を、「あれだ！」と直ぐに指摘できる。それは偏差値に代表されるような、疑似客観的なものに依存して、何事についても評価して序列や区別をつけようとする行動の構造であり、こうした行動傾向は社会的性格に由来し、その社会的性格を形成するであろう社会的構造条件は、子供や学校を評価し序列化することになっている「偏差値重視文化」として最終的に纏めうるだろう。ここで「偏差値文化」という言葉で一括し概念化するのには、どんな組織であれ、組織に所属する個人の成績の位置を様々な水準で正確に検知し、それを評価し、裁定するという、その組織の制度のことを指すことにする。したがってこの概念は、学校の成績は言うに及ばず、研究者の業績や保険外交員の契約高、大学業界での個別大学の位置など、なんであれ個を序列のうちに位置づける精神を指す。

偏差値そのものを直接に使用しそれに依存して行動することは、教育の場面の内部では特に必要なことではない。ひとつの尺度に収斂させることは有害ですらある。しかし偏差値には差異を正確に検知し位置を正確に決める機能がある。さらに位置を正確に評価してそれを利潤に結びつけ、素早く行動すれば資本主義の市場では勝利する。こうした社会経済的構造からの暗黙の要請が、何かに有利な学校を選択する、なるべく早くから教育を開始する、等々として紛れもなく教育の構造を決めているし、それは両親からの、学校からの、地域からの「本音の要請」として、育ち行く子供達に刻印されている。

## IX. 滲出する暴力

今わが国の社会では点検や評価が大流行である。気の弱い人間が真面目にやったら自

殺するしかなくなるかと思う自己評価などというものもあるし、教師の講義も学生から評価される。評価という淘汰に耐えるものだけが生き残り適応するのだとしたら、社会進化論を笑う訳にはいかないだろう。評価に熱中することは、建て前では(良くない)と決めつけている「偏差値教育」の延長上であることを自覚すべきである。偏差値を使う限り、様々な領域で社会の半数の人間は平均値以下となり、社会は何れ何がしかの意味で劣位であることを自覚せざるを得ない人々で満ちるのである。そしてこの直ぐ先に、「平均値の低いもの、評価の低いもの、様々な意味での劣位のもの、役に立たないとレッテルを張られた人、その意味でのスティグマの人々」を侮蔑し、更には差別し排除しようとする権威主義者達の帝国が在ることを予見すべきである。

排除や否定は、権威主義を、したがってやがて暴力的差別に至る道を準備する。内なる否定者の蔓延は暴力社会を準備しつつある。かつてアドルノと彼の共同研究者たちはファシズム尺度(6)を作ったが、項目分析で弁別力の高い項目を選んで行くという、地道で多大の労力を要する作業の結果、当初の目的を達成したが、この尺度での項目が参考になるので幾つかを挙げよう。

項目: 私達の社会問題のほとんどは、非道徳的で、腐敗した、邪悪な人々が、何らかの方法で一掃されるならば、解決されてしまうであろう。

項目: 全ての国民が政治の意志決定に参画できるようにしようことに伴う大きな困難は、彼等のうちのかなりの部分が、生来、無力であり、能力不十分な人間であるということだ。

項目: 高級住宅地にユダヤ人が入ってくると困るのは、彼等が、しだいに、そこにユダヤ的雰囲気をつくり出してしまうことだ

項目: 一般に十全な経済的保証はかえって有害である。食事と生活の元資にことかかなくなったら、大多数の人間は働かなくなるであろう。

項目: 子供たちは、その幼児期のうちに、ドルの価値、野心、能率、決断の重要性を学ばねばならない。

どの項目も、差異に敏感であること、切り分けられた両者を何らかの価値の次元で評価していることを述べている。評価が、ある方向性を持っているとき、つまり劣位に低い得点、高位に高い得点を与え、これらの項目の得点を積み重ねていけば高得点となり、高得点の人物は、ファシズム傾向がつよいと判定される。つまりファシズムは価値の次元での区別に敏感であることが得点の集計に表現され、また劣位を排除したり間に壁を作ろうとしていることが、各項目の記述文に顕著に現われている。

我々が想定する社会的性格は、権威主義的性格である。この権威主義的性格は、今のところは都会風に身ぎれいで、剥き出しの暴力や差別は隠しているようである。それでもこの性格を「権威主義的」と呼ぶのは、「醜い…」「不健康…」という否定的・排他的評価から「差別する…」という行動へはホンの一跨ぎであろうし、「差別」は様々な暴力の形態と一体であり、しかも我々は既に暴力が一部に滲み出てきている社会にあると感ずるからである。我々は権威主義的性格が極めて暴力に近いことを知っている。被差別者への暴力は、追隨者においては、暴力を振るうことがリーダーからの要請であるとして感得されて、意識的無意識的に自己自身において正当化されている。リーダーにカリスマ性がある場合は、暴力は絶対性すら持つようになる。強いリーダーは、それ自体は悪でも正義でもないが、強いということが、他者の意志に関わりなしに自らの意志を素早く決め、決定したことを地位の力で直ちに実行するというをいうなら、その強さは専制君主のそれであって、民主主義とは相容れず危険である。このようなリーダーは、追隨者の社会的性格如何によってはさらに危険になる。強いリーダーを求める雰囲気は、カリスマ的専制君主を求める雰囲気であって

危険信号である。専制的リーダーシップを求めている自らの権威主義的な依存の心理を、「トップに強いリーダーシップがないから・・・」と批判的に嘆いて見せて、高見に立って誤魔化してはいないだろうか。

現在の日本人の社会的性格は権威主義的性格へ近づいている。しかも状況悪化の速度が早まっている。特に経済的な困難さは、それがもともと根本的な困難さであり、社会的性格形成の第1理由であるが故に、多数の人間をこの位置からさらに明確な権威主義的性格へと導くかもしれない。困難をもたらしたと記号化された人々を排撃し、困難を救うというリーダーを求めてそれに依存する心理を生むかもしれない。我が国の社会はそこに近づきつつあるように思われる。この性格は、理由を挙げて暴力を容認する。ファシズム尺度(6)に次のような項目がある。

項目:生まれながらにして勇気と決断とをもった人があるものだ。

項目:人間は弱者と強者という二つの異なった種類に分けられる。

項目:若者に最も必要とされているものは、厳しい規律であり、断固とした決断であり、そして家族と祖国のために働き、闘おうとする意志である。

ファシズムには、このように、生まれながらのカリスマに従い、闘いには(彼等の)正当な理由があり、弱者には淘汰されてしかるべき理由があることになっている。「内なる否定者」にも、彼等は「醜く… 不健康である…」からという排除の理屈と、「そのうち理由がつけば…」加害する理屈が構成され始めているのかもしれない。

権威主義的に「正義は美しい」とすれば、正義と言われているものを実現しようとする暴力はどうなのだろうか。権威主義者はこの種の議論をする。正義は醜くないように正義は美しくもな

い。正義は美醜とは独立な次元である

差異を検知することに熱中しそれを評価する事に熱中する性格は、条件が整えば差別し排除することに熱中するだろうし、排除には暴力が必要になるだろう。

この国の未来について漠とした不安があるという。経済の不安定さがそれをもたらしているという。人々は経済の不安定さが社会の暴力化を同時にもたらすことを漠と感じている。競争を奨励し、ヴェンチャーを奨励し、リスクがあるんだという。負ける人、失敗する人、リスクを被った人が出ることは仕方がないという。当然だともいう。これらの人々を敗者と呼んでも不都合はないだろう。ならば、敗者を必然的に生み出す構造を暴力的構造と呼んでもいいだろう。競争社会とは実は暴力社会、少なくとも闘争奨励社会である。終身雇用制のもとで、さしたる能力はないけれど真面目で誠実さだけが取り柄で30年間営々と務めて定年になって、それでも家族と一緒に安定してそれなりに豊かな人生が送れた、ということはもうないのだという。この国の表層の直ぐ下を、暴力の川が流れている。様々な暴力的事件の噴出がどこかで繋がっていて、これらは、我々の社会に隠されていた暴力的構造の現れではないのかと、人々は感じ始めている。経済的困難さが、隠されている暴力構造を剥き出しにするのではないかと不安を持ち始めている。この源を絶つことは容易ではないが、真に民主的な社会的性格を形成し得るように、教育を経済構造に従属させず、経済構造と教育活動の双方に目配りしながら進んでいくのが暴力への道から我々を逸れさせてくれるだろう。

#### [引用文献]

- 1) 中原 淳一:青年たちの「環境」等へのイメージについて、人文社会科学論集(帯広畜産大学), 9巻, 3号, 181-224, 1996
- 2) 中原 淳一:青年達の「環境」関連概念についてのイメージとそれらが構成する階層クラスター

について, 人文社会科学論集(帯広畜産大学),  
9巻, 4号, 283-320, 1997.

- 3) 中原 淳一: 浮上してくる暴力—今日の日本人の社会的性格としての擬似権威主義—, 人文社会科学論集(帯広畜産大学), 10巻, 2号, 1—34, 1999.
- 4) フロム, E.: 自由からの逃走(日高六郎訳), 1968, 創元新社
- 5) フロム, E.: 人間における自由(谷口・早坂訳), 1969, 創元新社
- 6) アドルノ, T.W.: 権威主義的パーソナリティ(現代社会学大系, 田中他訳), 1980, 青木書店
- 7) Osgood, C.E.: The Cross-Cultural generality of Visual-Verbal Synesthetic Tendencies., *Behav. Sci.*, 1960, 5, 146-169
- 8) オスグッド, C.E.: 情意的意味体系の一般性, (吉田正昭訳), 計量心理学リーディングス, 1968, 誠信書房

[参考文献]

- 1) Harman, H.H.: *Modern Factor Analysis*, Chicago, University of Chicago Press, 1960
- 2) 田中 豊, 垂水 共之, 脇本 和晶: パソコン統計解析ハンドブックⅡ(多変量解析編), 1984, 共立出版
- 3) 奥野 忠一ほか: 統 多変量解析法, 1976, 日科技連出版
- 6) 田中 靖政: 記号行動論-意味の科学-(情報科学講座C・12・3), 1967, 共立出版